



TITLE:

# ON A GAMMA TWO-ARMED BANDIT PROBLEM WITH ONE ARM KNOWN(Optimization Theory and its Applications in Mathematical Systems)

AUTHOR(S):

濱田, 年男

---

CITATION:

濱田, 年男. ON A GAMMA TWO-ARMED BANDIT PROBLEM WITH ONE ARM KNOWN(Optimization Theory and its Applications in Mathematical Systems). 数理解析研究所講究録 1995, 899: 181-188

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/84503>

RIGHT:

## ON A GAMMA TWO-ARMED BANDIT PROBLEM WITH ONE ARM KNOWN

神戸商科大学

濱 田 年 男

(Toshio Hamada)

## 1. 緒言

次のような問題を考える. 2つの実験 $A_0$ と $A_1$ があり,  $A_0$ または $A_1$ のいずれかを行うことにより, パラメータ $(\beta, 1)$ および $(\gamma, u)$ のガンマ分布に従う観察値が得られるものとする.  $\beta$ と $\gamma$ の値は既知であるが,  $u$ の値は未知であり,  $u$ の真の値に対する事前分布として, パラメータ $(w, \alpha)$ のガンマ分布が与えられているものとする.  $n$ 期間の問題を考え, 各期において $A_0$ または $A_1$ のいずれかを行い, 観察値を得た後に次の期には, また $A_0$ または $A_1$ のいずれかを行うものとする. ある期において $A_1$ を行うことにより,  $u$ の値に対する事前分布は事後分布へと更新される. 目的は $n$ 期間の観察値の総和の期待値を最大にすることである. そのためには, 各期において, その前の期までに得られている情報を用いて, いずれの実験を行えばよいかを決定することである. この問題を $(P_{\beta, \gamma})$ と呼ぶことにする.

この種の問題は2腕のバンディット問題と呼ばれ, これまでに多くの研究結果が報告されている. たとえば, ガンマ分布の代わりにベルヌーイ分布を用いた場合には, 事前分布としてベータ分布を仮定し, 過去40年余りにわたって研究されてきている. たとえば, Bradt, Johnson and Karlin [3], Bellman [1], Yakowitz [11], Berry and Fristedt [2], Gittins [4], 等, また区間 $(0, 1)$ と $(0, u)$ の一様分布の場合には, 未知の $u$ に対して, Pareto分布が事前分布として仮定され, Woodroffe [10], Kalin and Theodorescu [9], Hamada [5, 6, 7] 等において研究されている. 特に[5]においては, 動的計画法により定式化し, 再帰方程式を解くことにより, 最適解を与える境界値の求め方と, それを用いた最適解の構造が与えられている. また,  $A_0$ と $A_1$ が指数分布に従う実験の場合にも, 未知パラメータの事前分布としてガンマ分布を仮定する場合には, 一様分布の場合よりはやや複雑であるが, 同様な再帰方程式を解くことができ, 最適解を得られることがわかっている[6]. しかし,  $A_0$ と $A_1$ がガンマ分布に従う実験の場合には, 再帰方程式を解くのはかなり複雑になり, 不可能のように思われた.

一方, 濱田 [8] において, 問題 $(Q_m)$ として, 2種類の実験 $e_0$ と $e_1$ のいずれかを行う

ことにより、パラメータ  $1$  及び  $u$  の指数分布から観察値を得るものとし、 $u$  の値は未知で事前分布として、パラメータ  $(w, \alpha)$  のガンマ分布を仮定できる場合に、 $e_0$  または  $e_1$  のいずれか一方のみを  $m$  回行うことができる場合を考え、 $m=2$  の場合の解を与えた。

本研究では、2 節において問題  $(P_{\beta, \gamma})$  を動的計画法により定式化し、最適解の構造を明らかにする。また、3 節では問題  $(Q_m)$  の動的計画法による定式化と、最適解の諸性質について論じ、4 節では最適解を表す境界値の求め方について論じる。5 節では  $\beta = \gamma = m$  の場合に問題  $(P_{\beta, \gamma})$  と問題  $(Q_m)$  が等価であることを証明し、さらに 6 節では問題  $(P_{\gamma, \gamma})$  の近似解を与える。

## 2. 問題 $(P_{\beta, \gamma})$ の動的計画法による定式化

問題  $(P_{\beta, \gamma})$  を動的計画法によって定式化する。まず

$G_n(\beta, \gamma, w, \alpha)$  : 残り  $n$  期間あり、 $u$  についての事前分布がパラメータ  $(w, \alpha)$  のガンマ分布のとき、以後最適政策を用いて得られる観察値の和の期待値の最大値

とくと、

$$G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) = \max\{G_n^0(\beta, \gamma, w, \alpha), G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha)\} \quad (1)$$

$$(n=1, 2, 3, \dots; G_0(\beta, \gamma, w, \alpha)=0)$$

ここに

$$G_n^0(\beta, \gamma, w, \alpha) = \beta + G_{n-1}(\beta, \gamma, w, \alpha) \quad (2)$$

および

$$G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha) = \int_0^\infty \int_0^\infty \{z + G_{n-1}(\beta, \gamma, w+z, \alpha+\gamma)\} \phi(z|u, \gamma) \phi(u|w, \alpha) dz du \quad (3)$$

である。ここに

$$\phi(u|w, \alpha) = \{\Gamma(\alpha)\}^{-1} w^\alpha u^{\alpha-1} e^{-wu}$$

である。ここで、(3)は

$$G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha) = \gamma w(\alpha-1) + \int_0^\infty G_{n-1}(\beta, \gamma, w+z, \alpha+\gamma) \phi(z|w, \alpha, \gamma) dz \quad (4)$$

となる。ここに、

$$\phi(z|w, \alpha, \gamma) = \{\Gamma(\alpha)\Gamma(\gamma)\}^{-1} \Gamma(\alpha+\gamma) w^\alpha z^{\gamma-1} (w+z)^{-\alpha-\gamma}$$

である。

[定理 1] 状態  $(n, \beta, \gamma, w, \alpha)$  において,  $A_0$  が最適ならば, 以後  $A_0$  ばかり行うのが最適である. よって,  $G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) = G_n^0(\beta, \gamma, w, \alpha)$  ならば,  $G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) = n\beta$  である.

この定理により, (1) 式は次のように書き換えることができる.

$$G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) = \max\{n\beta, G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha)\} \quad (5)$$

さらに次の補題が得られる.

[補題 1]  $G_n(\beta, \gamma, w, \alpha)$  は次の性質を満たす.

- (i)  $w$  について連続で, 単調増加である.
- (ii)  $\alpha$  について連続で, 単調減少である.
- (iii)  $\gamma$  について連続で, 単調増加である.
- (iv)  $\beta$  について連続で, 非減少である.

(証明) 帰納法による.  $\square$

[補題 2]  $G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) \leq n\beta + n\gamma w(\alpha - 1)^{-1}$

(証明) 帰納法による.  $\square$

[補題 3]

- (i)  $0 < w < (\alpha - 1)\beta / (n\gamma)$  ならば  $G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha) < n\beta$
- (ii)  $(\alpha - 1)\beta / n < w$  ならば  $G_n^1(\beta, \gamma, w, \alpha) > n\beta$

(証明) (4), (5) 式, および補題 2 による.  $\square$

これらより次の定理が得られる.

[定理 2]

- (i)  $w$  についての方程式  $G_n(\beta, \gamma, w, \alpha) = n\beta$  は唯一の根  $r_n(\alpha, \gamma, \beta)$  を持つ.
- (ii)  $r_n(\alpha, \gamma, \beta)$  は  $\alpha$  について連続で単調増加である.
- (iii)  $r_n(\alpha, \gamma, \beta)$  は  $\gamma$  について連続で単調減少である.

(証明) (i) は補題 1 (i) および補題 3 より明らか. (ii) は補題 1 の (i) および (ii) より明らか. (iii) は補題 1 の (i) および (iii) より明らか.  $\square$

これより, 最適政策は, “残り期間が  $n$  であり,  $A_1$  について事前知識が  $(w, \alpha)$  のとき,

$$w \begin{cases} > \\ = \\ < \end{cases} r_n(\alpha, \gamma, \beta) \text{ ならば } \begin{cases} A_1 \\ A_0 \text{ または } A_1 \\ A_0 \end{cases} \text{ を行うのが最適である. ”}$$

### 3. 問題(Q<sub>m</sub>)の動的計画法による定式化

問題(Q<sub>m</sub>)においては, 2種類の実験 $e_0$ または $e_1$ のいずれか一方のみを $m$ 回行うことができる.  $e_0$ を $m$ 回行うことを $E_0$ ,  $e_1$ を $m$ 回行うことを $E_1$ とする.  $e_0$ または $e_1$ のいずれかを1回行うことにより, パラメータ $l$ 及び $u$ の指数分布から観察値を得る.  $u$ の値は未知で事前分布として, パラメータ $(w, \alpha)$ のガンマ分布が仮定される. この問題については, 濱田[7]において動的計画法によって定式化され,  $m=2$ の場合には最適解が求められている. 再帰方程式は

$F_{n, m}(w, \alpha)$ : 残り $n$ 期間あり,  $u$ についての事前分布がパラメータ $(w, \alpha)$ のガンマ分布のとき, 以後最適政策を用いて得られる観察値の和の期待値の最大値

$F_{n, m}^1(w, \alpha)$ : 残り $n$ 期間あり,  $u$ についての事前分布がパラメータ $(w, \alpha)$ のガンマ分布のとき, まず $E_1$ を行い, 以後は最適政策を用いる場合に得られる観察値の和の期待値の最大値

とおくと,

$$F_{n, m}(w, \alpha) = \max \{mn, F_{n, m}^1(w, \alpha)\} \quad (6)$$

$$(n=1, 2, 3, \dots; F_{0, m}(w, \alpha)=0)$$

で与えられる. ここに

$$F_{n, m}^1(w, \alpha) = \int_0^\infty \int_0^\infty \dots \int_0^\infty \left\{ \sum_{i=1}^m z_i + F_{n-1}(w + \sum_{i=1}^m z_i, \alpha + m) \right\} \prod_{i=1}^m \phi(z_i | u) \phi(u | w, \alpha) dz_i du \quad (7)$$

となる. (7)は

$$F_{n, m}^1(w, \alpha) = mw(\alpha - 1)^{-1} + \int_0^\infty \int_0^\infty \dots \int_0^\infty F_{n-1}(w + \sum_{i=1}^m z_i, \alpha + m) \times \phi(z_1, z_2, \dots, z_m | w, \alpha) dz_m \dots dz_2 dz_1 \quad (8)$$

と書き換えられる. ここに

$$\phi(z_1, z_2, \dots, z_m | w, \alpha) = \alpha + m P_m W^\alpha (w - \sum_{i=1}^m z_i)^{-\alpha - m}$$

である. さらに最適解の諸性質として,  $F_{n, m}^1(w, \alpha)$ が $w$ について連続で狭義単調増加なことより,  $w$ についての方程式

$$F_{n, m}^1(w, \alpha) = mn$$

の解の存在と一意性が得られている。

[定理 3] (濱田[7])

(i)  $F_{n,m}^1(w, \alpha)$  は  $w$  について連続で狭義単調増加,  $\alpha$  について連続で狭義単調減少である。

(ii)  $w$  についての方程式  $F_{n,m}^1(w, \alpha) = mn$  は唯一の根  $s_{n,m}(\alpha)$  をもつ。

#### 4. 問題 ( $Q_m$ ) の最適解

問題 ( $Q_2$ ) の最適解を求める一つの方法は, 濱田[7]において与えられているが,  $m$  の値が 3 以上の場合にはそのままでは拡張できない。ここでは, 一般の  $m$  に対する最適解を求めるための方法を与える。

$n=1$  に対して,

$$F_{1,m}(w, \alpha) = \begin{cases} m, & 0 < w < s_{1,m}(\alpha) \\ mw(\alpha-1)^{-1}, & s_{1,m}(\alpha) \leq w \end{cases}$$

$n \geq 2$  に対して,

$$F_{n,m}(w, \alpha) = \begin{cases} nm, & 0 < w < s_{n,m}(\alpha) \\ (n-t+1)mw(\alpha-1)^{-1} + (t-1)m \\ \quad + mw^\alpha \sum_{k=0}^{(n-s+1)m-1} \sum_{i=1}^{s-1} C_{n,k,i,m}(\alpha) \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m) - w\}^k / k!, \\ \quad s_{n,m}(\alpha + (n-t)m) \leq w < s_{n-1,m}(\alpha + (n-t+1)m) \quad (2 \leq t \leq n) \\ nmw(\alpha-1)^{-1}, & s_{1,m}(\alpha + (n-1)m) \leq w \end{cases}$$

ここに,  $C_{n,k,i,m}(\alpha)$  は  $i=1, 0 \leq k \leq m-1$  に対して

$$C_{n,k,1,m}(\alpha) = -\alpha + k - 1 P_k \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m)\}^{-\alpha-k} \\ + \alpha + k - 2 P_{k-1} \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m)\}^{-\alpha-k+1},$$

$1 \leq i \leq n-2, 0 \leq k \leq m-1$  に対して

$$C_{n,k,i,m}(\alpha) = \sum_{h=k}^{m-1} [-\alpha + h - 1 P_h \{s_{i,m}(\alpha + (n-i)m)\}^{-\alpha-h} \\ + \alpha + h - 2 P_{h-1} \{s_{i,m}(\alpha + (n-i)m)\}^{-\alpha-h+1} \\ - \sum_{j=0}^{(n-1-i)m-1} \sum_{t=1}^i C_{n-1,j,t,m}(\alpha) \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m)\}^{-\alpha-h+1}]$$

$$\begin{aligned}
& -s_{i,m}(\alpha + (n-i)m)^{j+m-h} \alpha_{+m-1} P_m / (j+m-h)! \\
& + \sum_{j=0}^{(n-i)m-1} \sum_{t=1}^{i-1} C_{n-1,j,t,m}(\alpha+m) \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m) \\
& - s_{i,m}(\alpha + (n-i)m)^{j+m-h} \alpha_{+m-1} P_m / (j+m-h)!\} \\
& \times \{s_{i,m}(\alpha + (n-i)m) - s_{1,m}(\alpha + (n-1)m)\}^{h-k} / (h-k)!
\end{aligned}$$

$i=n-1$ ,  $0 \leq k \leq m-1$  に対して

$$\begin{aligned}
C_{n,k,n-1,m}(\alpha) &= \sum_{h=k}^{m-1} [-\alpha_{+h-1} P_h \{s_{n-1,m}(\alpha+m)\}^{-\alpha-h} \\
& + \alpha_{+h-2} P_{h-1} \{s_{n-1,m}(\alpha+m)\}^{-\alpha-h+1}, \\
& + \sum_{j=0}^{m-1} \sum_{t=1}^{n-2} C_{n-1,j,t,m}(\alpha+m) \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m) \\
& - s_{n-1,m}(\alpha+m)^{j+m-h} \alpha_{+m-1} P_m / (j+m-h)!\} \\
& \times \{s_{n-1,m}(\alpha+m) - s_{1,m}(\alpha + (n-1)m)\}^{h-k} / (h-k)!
\end{aligned}$$

$1 \leq i \leq n-2$ ,  $m \leq k \leq (n-i)m-1$

$$C_{n,k,i,m}(\alpha) = C_{n-1,k-m,i,m}(\alpha+m) \alpha_{+m-1} P_m$$

さらに

$$s_{1,m}(\alpha) = \alpha - 1$$

および,  $s_{n,m}(\alpha)$  ( $n=2, 3, \dots$ ) は次の  $w$  についての方程式の唯一の根である.

$$-1 + w/(\alpha - 1) + w^\alpha \sum_{k=0}^{m-1} \sum_{i=1}^{n-1} C_{n,k,i,m}(\alpha) \{s_{1,m}(\alpha + (n-1)m) - w\}^k / k! = 0$$

## 5. 問題 $(P_m, m)$ と問題 $(Q_m)$ の同値性

問題  $(P_{\beta, \gamma})$  において,  $\beta$  と  $\gamma$  が正整数で  $\beta = \gamma = m$  のとき, 変数変換

$$z = y_1 + y_2 + \dots + y_m$$

$$z_2 = y_2$$

$$z_m = y_m$$

により次の補題が得られる.

[補題 4]

$$\int_0^1 f(z) \phi(z, w, \alpha, \gamma) dz = \int_0^\infty \int_0^\infty \cdots \int_0^\infty f\left(\sum_{i=1}^m y_i\right) \alpha + m - 1 P_m W^\alpha \left(w - \sum_{k=1}^m y_k\right)^{-\alpha - m} dy_m \cdots dy_2 dy_1$$

この補題を用いて次の定理を得る.

[定理 3]  $n \geq 1, m \geq 2, w > 0, \alpha > 1$  に対して,

$$G_n(m, m, w, \alpha) = F_{n, m}(w, \alpha)$$

が成立する.

(証明) (4), (5), (6), (8), および補題 4 による.  $\square$

## 6. 問題 $(P_{\gamma, \gamma})$ の近似解

定理 3 により, 問題  $(P_{m, m})$  の解は問題  $(Q_m)$  の解と一致する. したがって自然数  $m$  に対して,  $\gamma = m$  ならば

$$r_n(\alpha, m, m) = s_{n, m}(\alpha)$$

が成立する. 任意の実数  $\gamma$  に対して,  $r_n(\alpha, \gamma, \gamma)$  をどのように求めるかは, 重要な問題である. 再帰方程式 (1) と (4) を直接解くのは困難である. そこで, 補題 1 の (iii) を用いて, 近似的に次のように求める方法を提案する.  $[\gamma]$  は  $\gamma$  を越えない最小の整数とする. このとき,

$$r_n(\alpha, \gamma, \gamma) = (1 - \gamma + [\gamma]) s_{n, [\gamma]}(\alpha) + (\gamma - [\gamma]) s_{n, [\gamma] + 1}(\alpha)$$

により  $r_n(\alpha, \gamma, \gamma)$  の値を求めて,

“残り期間が  $n$  であり,  $A_1$  について事前知識が  $(w, \alpha)$  のとき,

$$w \begin{cases} > \\ = \\ < \end{cases} r_n(\alpha, \gamma, \gamma) \text{ ならば } \begin{cases} A_1 \\ A_0 \text{ または } A_1 \\ A_0 \end{cases} \text{ を行うのが最適である”}$$

とすることにより, 近似解を得ることができる.

## 文 献

[1] Bellman, R. (1956). A problem in the sequential design of experiments.

Sankhyā A 16, 221-229.



- [2] Berry, D. A. and Fristedt, B. (1985). Bandit Problems: Sequential Allocation of Experiments. Chapman and Hall, London and New York.
- [3] Bradt, R. N., Johnson, S. M. and Karlin, S. (1956). On sequential designs for maximizing the sum of  $n$  observations. Ann. Math. Statist. 27, 1060-1074.
- [4] Gittins, J. C. (1989). Multi-Armed Bandit Allocation Indices. Jon Wiley & Sons, New York.
- [5] Hamada, T. (1978). A uniform two-armed bandit problem: the parameter of one distribution is known. J. Japan Statist. Soc. 8, 29-35.
- [6] Hamada, T. (1987). A two-armed bandit problem with one arm known including switching costs and terminal rewards. J. Japan Statist. Soc. 17, 21-30.
- [7] Hamada, T. (1992). A discounted uniform one-armed bandit problem. Sequential Analysis, 11, 1-15.
- [8] 濱田 (1992), A two-armed bandit problem with one arm known and with batch sampling. 京都大学数理解析研究所講究録798, 213-218.
- [9] Kalin, D. and Theodorescu, R. (1990). A uniform two-armed bandit problem with one arm known revisited. J. Japan Statist. Soc. 20, 159-168.
- [10] Woodroffe, M. (1976). On the one arm bandit problem. Sankhyā A 38, 79-91.
- [11] Yakowitz, S. J. (1969). Mathematics of Adaptive Control Processes. American Elsevier Publishing Co., New York.